

養護教諭部会

I. 研究の概要

1. 研究主題

健康について考え、心豊かに自分らしく生きる子どもの育成をめざして

2. 主題設定の理由

近年の少子高齢化や都市化、急激に進展しているグローバル化や情報化など、社会環境や生活様式の急激な変化は、児童生徒の心身の健康に大きな影響を与え、生活習慣や環境に起因する疾患やアレルギー性疾患、新たな感染症の増加、さらには心の病など、健康課題を多様化させている。同時に、人間関係の希薄化、幼少期に経験することが望まれる様々な生活体験・社会体験・自然体験の機会の減少は、他者への関心や愛着、信頼感を育てる大切な機会を減少させ、人との関わりをつくることやコミュニケーションをとることがうまくできない子どもたちの増加につながっているように思われる。いじめ・不登校・貧困・虐待など様々な問題は、児童生徒の健康問題との関連が深く、子どもたちが安心して生活できることが難しい状況を生み出している。子どもたちの健康課題には、その背景に自己肯定感や自尊感情の低さが存在することが少なくない。対人関係によるストレスや不安などから、からだに不調をきたす事例もある。このように複雑で変化の激しい社会において、私たちは、子どもたちの自己有用感・自己肯定感（自尊感情）を高め、自分自身も他者をも大切にできる子どもを育てたいと考える。それをもとに健康に関する知識・技能をもち、自ら意思決定し・行動選択できる力、さらには他者とかかわる力を持つ子どもを育てたい。そのためには、養護教諭として、子どもたち一人一人を大切に受容し、職務の特性を生かした実践とおおして具体的な対応や支援の在り方を探求することが重要と考える。具体的には、常に「養護」とは何かを問い続け、子どもの健康と人権を守り育てる養護実践を深めながら、確かな連携方法を模索し、家庭や地域社会、教職員に対する効果的な情報発信の方法を検討するとともに、健康課題について、家庭と学校が課題を共有しながら学校全体・地域社会全体で対応していく必要がある。以上のように、複雑かつ多様化した子どもたちの健康課題に対し養護教諭の視点を大切にしたりとくみが必要と考え、標記の研究主題を設定した。

研究の経過

平成 16 年度から平成 25 年度までの 10 年間、「健康について考え、自分らしく生きていくことができる子どもの育成をめざして」という研究主題のもと、子どもたちの個々の健康・発達課題に寄り添い、対応や支援のあり方を研究し実践してきた。子どもたちの健康課題は、ますます複雑で多様化している。その点を踏まえ、今後も養護教諭の特性を生かした養護実践を継承しつつ、さらに深め発信していくことが重要であるとおさえた。その課題解決に向けて、26 年度から新たな研究主題を設定している。

新しい研究主題のもと、各ブロックは具体化した主題を設定し研究を推進してきた。さらに各ブロックの連携を深めることにも重点を置き、今日的な課題を共有し、より研究を深めてきた。さらに、第二次研究協議会の分科会は、研究計画に基づく、積極的な討議があり、理論・実技研修会では、会員一人一人の課題の解明と日常の養護実践に結び付く成果をあげている。30 年度は、多くのブロックで新たな研究に取り組むことになる。課題を明らかにし、研究の基礎を作り上げていく年度としたい。また、横のつながりを大切にし、他ブロックの研究も積極的に学び取るとともに、それぞれのブロックの研究に生かしていくようにすすめていきたい。

3. 研究内容

<研究内容 1>

子どもたちの実態を把握し、問題点を明確にする。

<研究内容 2>

子どもたちが自己肯定感をもち、自分らしい選択をし、人とのつながりを大切にしながら生きていけるよう、支援の在り方を検討する。

<研究内容 3>

保健室で気がついた子どもたちの実態について、教職員・家庭・社会にどのように発信し連携していくのか、その方法を検討する。

4. 研究方法

- (1) 会員一人一人の日常実践に基づいた市町村ブロックの共同研究を推進する。
- (2) 理論研修会や実技研修会を開催し、日常実践や今日的な課題解明につなげていく。
- (3) 各ブロック間の連携を深め、より一層、研究が深まる取組をする。

Ⅱ. 研究の経過と成果

1. 全体の実践の経過

(1) 役員研修会・推進委員研修会の内容

- 4月10日 今年度の業務・研究計画の確認
- 5月14日 研究協議会・実技研・予算について
- 7月3日 研究協議会・実技研・理論研について
- 8月21日 実技研について
- 9月18日 研究協議会・次年度研究・石狩の教育・ブロック研究レポートについて
- 10月11日 研究協議会について
- 11月13日 研究協議会反省・理論研反省・分科会資料集について
- 2月19日 研究協議会反省・研究活動の反省・次年度へ向けて

- ・ ブロック情報・部会情報の発行
- ・ 推進委員研修会ごとのブロック交流
- ・ 部会HPの更新

(2) 実技研修会

8月28日(火) 石狩教育研修センター

「指ヨガ ～身体の不調もすっきり改善!～」

講師 手のひらセルフケア協会 インストラクター 三浦 瑞江 氏

(3) 第二次研究協議会

10月12日(金) 江別市立上江別小学校

- ・ レポート発表
- ・ 分科会 (保健室小・保健室中・救急処置・健康診断・アレルギー・相談活動)
- ・ 掲示物交流
- ・ 理論研修会 「発達障がいのある子どもの支援」～望ましい保健室の対応～

講師 札幌学院大学 人文学部人間科学科 教授 二通 諭 氏

2. 各ブロックの研究と成果

<当別・新篠津ブロック>

1. 研究主題

健康について考え、こころ豊かに自分らしくすこやかに生きる子どもの育成をめざして
～子供によりそった養護教諭の執務の在り方～

2. 研究の経過と成果

養護教諭の執務を見直す中で、「アレルギー対応について」焦点をあてた。

- ①「アレルギー関係文書」：アレルギー調査、校外行事時の事前調査、アレルギー対応マニュアル・フローチャートを持ち寄り交流した。
- ②食物アレルギー対応マニュアルを作成し、全職員が緊急事態に適切な対応ができるようにフローチャートの確認とエピペン注射の研修などを通して共通理解を図った。
- ③「新篠津村学校給食センター視察」：アレルギーを持った児童生徒が食べ物を自分で選択する力を身に付けることの重要性について共通理解を図った。今後も食物アレルギーについて栄養教諭と連携を取り円滑な対応ができるよう検討していくことの大切さを確認できた。

3. 研究のまとめと今後の方向

交流を通して、児童生徒一人一人のアレルギーを把握し、全職員で情報を共有し、迅速な対応が行える状況を整えておくことの重要性を再認識した。そのため実際のアレルギー対応の事例について、情報交換して、自校の執務の見直し、改善・向上につなげていきたい。

< 北 広 島 ブ ロ ッ ク >

1. 研究主題

色のバリアフリーへのとりくみ
～誰もがわかりやすい環境を～

2. 研究の経過と成果

この研究を始めるにあたり、色覚検査の歴史、色覚特性や色のバリアフリーについて改めて学習し、生活の中にすでにカラーユニバーサルデザインがとり入れられていたことなどを知ることができた。

研究実践においては、カラーバリアフリーの考えから、対応における留意事項、教室や廊下などで配慮が必要な箇所があること、教材にも見えにくいものがあることを確認し、教職員、保護者、生徒に向けた資料を作成した。特に、教職員に向け発信した資料は反響が大きく、理解を示し、改善してくれる様子がみられるようになった。

さらに、他機関とも協力体制をとることができたことは大きな成果となった。

3. 研究のまとめと今後の方向

色覚特性を個性ととらえ、学校では色の見え方に不安を持つ子どもや保護者に寄り添い、色覚に対しての正しい知識を伝え、理解を深めることで、差別や偏見をなくしていくことが大切である。進学・就職においても、本人や保護者の不安を取り除き、不必要な差別をなくすとりくみが必要である。本人の自覚に頼るだけではなく、カラーユニバーサルデザインの考え方に基づく、誰もが見えやすい色使いや工夫を学校全体で行っていかれたらと考えている。「みんなちがって みんないい」「誰もがわかりやすい環境」をめざして、今後も学校全体のとりくみとしてすすめていきたい。

< 千 歳 ブ ロ ッ ク >

1. 研究主題

自分の健康に関心を持ち、よりよい生活習慣について考え行動できる子どもの育成をめざして
～健康診断をとおして～

2. 研究内容

平成26年の学校保健安全法施行規則の一部改正を受けて、改めて健康診断全般の目的や実施方法、指導内容について確認や見直しの必要性を感じ、研究を進めた。

研究1年次目の今年度は、「身体測定、視力検査、聴力検査」「内科検診（結核・四肢の状態）、眼科検診、尿検査」「歯科検診、耳鼻科検診、心臓検診」の3グループに分かれ、担当の健康診断項目について目的や方法、技術的基準の学習を行い、課題を明らかにした。子どもが健康診断を自分のこととして積極的に受けられるよう、どのように実践していけばよいのかという視点で見直し、検討を行った。

理論研修会では部会員を講師に、「色覚検査について」と題して研修を行い、色覚検査の方法や、検査の際に配慮すべきことを確認した。また、色覚に関する報道特集番組のDVDを視聴し、色覚に特性のある当事者の考えを知り、理解が深まった。

3. 研究の成果と課題

健康診断について改めて学習し直したことで、課題が見え、健康診断に対する共通理解が得られた。今後は、子どもが健康診断を自分のこととして受け、その後のよりよい生活を考え行動できる子どもの育成を意識して研究を深めていく。次年度は、今年度の学習や見直しを生かして、主題に沿った健康診断となるように各校の実態に合わせて実践する。

< 江 別 ブ ロ ッ ク >

1. 研究主題

「自分のからだに関心を持ち、自ら考え行動できる子どもの育成をめざして」
～保健だより・保健指導を通して～

2. 研究内容

研究を進めるにあたっては26年度に部会で確認した「養護教諭としてのスタンス」「共通理解・共通認識」を基本とし、保健だより・保健指導の研究の指標になるものとして「大事にしたいこと」と「作成するときのポイント」をまとめた。研究1年目となる今年度は、子どもたちに伝えたいこととして「香り（化学物質）」「色覚（健康診断）」「ハチ・虫刺され（アレルギー）」を選び、3グループに分かれて保健だよりや保護者・教職員向け文書を作成した。

3. 研究の成果と課題

今年度は各グループが作成した保健だよりや保護者・教職員向けの文書内容を全体で検討、交流することで言葉やレイアウトなどについて意見を出し合いながら精選し、よりよいものにすることができた。

香料による健康被害・色覚・アレルギーについては、当事者になる場合とそうでない場合により個々に感じ方や考え方が違う。押しつけになることなく科学的に学ぶことで、主体的に考え行動できる子どもの育成をめざしたい。

次年度は実際に作成したものを教職員・保護者・子どもに提示し、意識や行動の変容について検証することでよりいっそう心に届く実践につなげていきたい。

< 恵 庭 ブ ロ ッ ク >

1. 研究主題

自分のからだと向き合い、自ら選択し表現できる子どもの育成をめざして
～養護教諭のスタンスに立った子どもの支援と役割～

2. 研究の経過と成果

今年度からは、子どもたちの健康問題をみつめて、昨年度まで研究してきた「養護教諭のスタンス」をもとに、養護教諭としての支援の在り方を研究することとした。

「健康相談活動」については、各校の健康相談事例を事例集としてまとめ、「子どもたちの現状・背景・問題点」「学校・家庭・教職員につなげる手立て」「問題のとらえ方・受け止め方・つなげ方【アセスメントの方法】」「養護教諭のスタンスに立った支援方法」の交流視点を明らかにしながら、小学校と中学校のグループに分かれて交流を行った。

「健康カード」については、小学校・中学校ごとに健康カードの活用状況を交流した。中学校では、健康カードを個人の記録用として活用しており、小学校では健康診断の結果通知として活用していることを確認した。また、中学校に記載のなかった「住所」「連絡先」「既往症など」の記載欄があり、小学校については、個人情報の記載欄の検討を行っていく。

3. 研究のまとめと今後の方向

「健康相談活動」についての事例交流では、各校の事例は多種多様であったが、各自の支援の展開方法を学ぶことができた。今後は、事例から問題のとらえ方や受け止め方、つなげ方のさまざまな角度から支援方法を深めていきたい。

「健康カード」については、活用の状況が各校によって異なることがわかり、健康情報を扱うという観点から、記載情報の扱いを検討し、日常の執務をしやすいう、他市町村のカードも参考にしよりよいものを作り上げていきたいと考えている。

＜ 石 狩 ブ ロ ッ ク ＞

1. 研究主題

「自らの命を守るために主体的に行動する子どもの育成をめざして」

～事例交流を通して～

2. 研究の経過と成果

今年度は、3年研究の1年次目になる。まずは、救急処置対応に関する課題とは何かを探るところから始めた。そこで、緊急時の対応や救急処置および校内体制について各校での事例を交流し緊急時の子どもを巡る状況やとりくみを検討した。

様々な事例を交流する中で、以下の点が課題であることが明確になった。

・養護教諭自身がスキルアップを図ること。

・養護教諭だけではなく、学校全体の救急処置のスキルを高めること。

〔 資料提供を朝の打ち合わせを利用して行ったり、職員会議の際など保健室利用状況とともにさまざま
な情報を提供したりし、職員へ発信していくなど。 〕

・事故が起きる前、起きた時、起きた後に養護教諭や学校がすべきことを明確にすること。

〔 救急車到着時間の確認、様々な場面のシミュレーションをする、危機管理体制の確立 〕

3. 研究のまとめと今後の方向

事例交流を行うことによって、少しずつ教職員側の課題が明らかになってきた。今後も事例交流を行い、さまざまな状況での対応について話し合いながら、教職員が子どもの命を守るためにできることとは何かを明らかにしていくとともに、子どもが自らの命を守るためには何が必要なのかを探っていきたい。

Ⅲ. 実技・理論研修会

8月28日(火) 14:30～

於) 石狩教育研修センター

1. 実技研修会

テーマ 「指ヨガ～身体の不調もすっきり改善!～」

講師 手のひらセルフケア協会 インストラクター 三浦 瑞江 氏

指ヨガは、「指だけでできる」「どこでもできる」「いつでもできる」「簡単にできる」「すぐに効果が実感できる」という特徴を持つ。

【指ヨガの効果】

《脳と心への効果》

・脳の活性化・自律神経の調節・リラクゼーション・スキンシップ など

《健康効果》

・血行促進・諸症状の緩和、解消・内臓機能を高める 等

《美容効果》

・姿勢が良くなる・美肌効果・ダイエット効果・しなやかな体になる など

【指ヨガの基本ルール】

《落ち着ける場所でゆっくりと》

いつでもどこでも気軽にできるのが「指ヨガ」の良いところだが、できれば静かで落ち着いた環境が理想。心がリラックスすれば身体もほぐれて、より高い効果が得られる。また、食後1時間以内は避ける。

《息を吐きながらほぐす》

始める前には、リラックス。息を吸って、ゆっくりと息を吐きながら手指に圧をかけ、息を吸いながら圧をゆるめる。



《イタ気持ちいい程度に》

基本的には、関節を痛めないように、はじめは優しく行う。強い痛みを我慢して行うのではなく、「気持ちよい」感覚がちょうどよい加減。



～指ヨガ終了後、講師の三浦氏と一緒にリラックスした笑顔で記念撮影～

2. 理論研修会

テーマ 「発達障がいのある子どもの支援」

～望ましい保健室の対応～

講師 札幌学院大学 人文学部 人間科学科 教授 二通 諭 氏

10月12日(金) 13:30～
於) 江別市立上江別小学校

場面緘黙症のドキュメンタリー「～想いかける～」を上映し、幼少期から大学進学までの様子が紹介され講演が始まる。

○特別支援教育の理念、支援の原理、発達支援における困難軽減の原理などについて発達障がいの子どもの事例を通して学んだ。

○義務教育期の発達障がい児童生徒の在籍率と障がい児童生徒が右肩上がりが増加している現状にあり、加齢とともに高機能自閉症系が増えている。さらに加齢とともに社会性の問題が顕在化してくる。



【発達障がいにおける困難軽減の原理】

①周囲の適切な理解と対応

→適切な理解と対応とは、一定の知識を有したうえで、個別的な課題についての見通しを持つこと。見通しをふまえた行動。

②本人の工夫と努力

もう一人の自分を演じていくことで成長していく。ただし、自身の発達障がい性を完全除去しようとは思わないこと。素の自分を楽しまいたわる。

→自分の「取扱説明書」を自分で作る心意気

→時に「自分の頭を信用しない」という自己客観視。メタ認知。



3. 研修会の成果

(1) 実技研修会

いつでも、どこでも、簡単にできる「指ヨガ」は、子どもとのコミュニケーションやスキンシップにも非常に有効であると感じた。自分自身の症状の緩和に役立つばかりではなく、便秘や冷え性などの不調を和らげるため直接子どもたちの手に触れて、教えてあげることができる大変有意義な研修となった。

(2) 理論研修会

支援を要する児童生徒が増加している中、二通氏の実践事例を通して発達障がいのある児童生徒とのかかわり方を改めて考えさせられた。具体的な言葉掛けや行動の理解は、なかなか考えつかないことも多かったため養護教諭としてどのようにかかわり、声掛けを行っていくべきか、十人十色である子どもたちへの理解について多くのヒントをもらうことができた。

IV. 第二次研究協議会

1. 分科会討議

<保健室（小）①②>

- ・事例交流の中で、日々の悩みについて明日からの実践につながるたくさんのアドバイスをもらうことができた。
- ・「一人で抱え込まない」「他の教職員と連携する」ことが、子どもたちにとってよりよい対応となる。
- ・学校には様々な職種の方がいる。「子どものために」という思いはみな同じであるため、養護教諭としてどのように連携を図っていくべきかが今後の課題である。

<保健室（中）①②>

- ・不登校生徒が多くなっている傾向にあり、その対応で困っている学校も増えている中、具体的な対応策など交流することができた。
- ・不登校生徒の対応は、養護教諭が一人で抱え込まないようにする。管理職や学年と話し合い、職員会議などで学校としての対応を共通理解することが大切。
- ・中学校は、メンタルヘルスに関わる相談・入室も多いという実態もあった。スクールカウンセラーや専門機関など関係機関につなぐケースも多いことが分かった。

<救急処置①②>

- ・各校の事例を交流することで、自己のスキルや校内の救急体制の振り返りをすることができた。
- ・管理体制を整えるアイデアや処置、保護者対応のスタンス（迷ったら病院、やりすぎくらい丁寧を心がける）を共有することができた。
- ・救急バッグについては「コンパクト化」「見える化」を心がけ、いつでもだれでも使用できる状況にしている実践を実際に手に取り、見せていただいた。
- ・課題として、養護教諭不在時も、緊急時の対応や処置ができる体制を整えるため、職員への研修や紙面（フローチャートなど）の必要性があげられた。

<健康診断>

- ・健康診断やそれにかかわる前後の作業や対応などを交流し、様々な学校の健康診断について学びを深めることができた。
- ・機械的、事務的になっている健康診断を子どもたちにとっても意味のあるものにしていくため、養護教諭として今回あげられた課題について向き合い、改善されていくように働きかけていく必要がある。

<アレルギー>

- ・実践資料をもとに、アレルギー対応の具体的な内容や工夫など、各校の実態を交流した。
- ・給食対応について、子どもたちの命を守るためにどうあるべきか、詳しく交流することができた。
- ・子どもが安心して学校生活を送れるための体制を整えるためには、保護者の気持ちへ寄り添うことが重要であり同



時に、学校でできること、できないことを明確に伝えることも不可欠であることを確認できた。

- ・症状の有無に関わらず、どの子にとっても安心安全な学校環境を整備すること、そして偏見や差別につながらないよう、みんなで学んでいくことが大切であることを再確認できた。

<相談活動>

- ・校種、規模の違いによって様子は異なるが、各校での保健室を中心とした様々な対応について交流することができた。
- ・記録を残すことの大切さ、保護者へのアプローチの方法、校内や外部機関との連携の重要性についても再確認できた。
- ・問題が多様化し、養護教諭だけでは対応が難しいことも多くなっているため、校内外で必要と思われる連携をしっかりと行い、チームとして対応することが必要不可欠であることを課題として確認できた。

2. 掲示物交流

今年度も各ブロックによる掲示物の紹介を行い、工夫を凝らしたたくさんの作品を交流することができた。



V. 部会研究の成果と課題

1. 成果

「健康について考え、心豊かに自分らしく生きる子どもの育成をめざして」の研究主題のもと、各ブロックが具体化した主題を設定し、研究を推進してきた。さらに、各ブロックで行われた理論研修や実技研修には、他ブロックからの積極的な参加も得られ、今日的な課題を共有し、より研究を深めることができた。

また、第二次研究協議会の分科会は、研究計画に基づく討議の柱に沿った内容について討議され、課題解決に向けての方向性を探ることができた。

実技・理論研修会においては、指ヨガの体験や発達障がいについての学びを深め、今後の実践に結び付く良い研修となった。

2. 課題

ほとんどのブロックが1年目の研究を終え、次年度はこれまでの研究をもとに、さらにそれぞれのテーマに沿って研究を深め、実践を重ねていかななくてはならない。そのためには、各ブロックでの研究が全会員のものとなるよう、他ブロックの研究も積極的に学び取るとともに、それぞれのブロック研究に生かしていけるよう進めていきたい。また、理論研修会・実技研修会は、研修意欲が高まり課題解決に結び付くような内容を検討していきたい。

(文責 三島 宏枝)